

## 編集後記

### 編集長(ダン シロウ)

今号からも新連載が二本。それぞれ、編集者と個人的繋がりのある方々だ。どうぞ息長くの執筆をよしく。

マガジンは活発に14年目突入だ。六十名もの連載執筆者となると、入れ替わりも休載もあり、このところ300ページあたりで落ち着いてきている。プリントするとけっこうな厚さだが、Webで興味のある所だけ読む姿勢なら、適度なメニューの量かもしれない。

年四回の定期刊行を、粛々と続けながら、腹の中では、「こんな事はなかなか出来るものではないぞ」といつも、十数年を振り返ったりしている。(ご存知のように、結構な自慢屋さんなもんで！)

世間にはこのような刊行物が山のようにあって、その編集担当者は口を揃えて、原稿の遅れる執筆者への不満を漏らしている。断言するが、編集者のこのようなコメントくらい無意味なものはない。そんな愚痴にはひとかけらの改善へのきっかけもない。

これは編集に付きまとう問題を、どう対策、解決するかが焦点の課題なのだ。多くの人達(素人も玄人も)が、昔から相も変らぬことをこねくり回している内に、こういった発行物がどんどん消えた。

対人援助学マガジンは、息長く、創刊当時から変わらずの執筆者と、新しく開始して長く書き続けてくれる方々に支えられてきた。それにゴタクを言わずに役割に徹してくれる編集者二人の貢献も大きい。この良循環が存続の秘訣だ。

しかしそれに一つ付け加えるとしたら、マガジンが継続定期刊行できるためのシステムを構築できていることが大きい。何でもそうかもしれないが、見えないところにセットされたシステムなど気がつく人は少ない。

しかし継続の秘密はそこに隠されていて、それを発見して具体化し、世の中の新たな智の財産にする時代に突入している。

昔からある愚痴を継承して、ありきたりなことを口にしている人は、それ故に滅びるのである。

### 編集員(チバ アキオ)

「報道の自由度ランキング 2023」を国際 NGO 「国境なき記者団」は今年も発表した。調査対象の180カ国・地域のうち、日本は68位。前年よりは順位を上げたが、主要7カ国(G7:日本、アメリカ、カナダ、フランス、イギリス、ドイツ、イタリア、EU)の中で今年度も最下位だった。日本の状況について、「政治的圧力」や「ジェンダー格差」などが指摘されたニュースがあった。

こうした状況から最も影響を受けるのは若い世代である。自分たちがみている、知っている状況は、偏っている、若しくは限られていると気づくのがどうしても遅くなる。長く生きてくると様々な場面でなかなか届かなかった情報に触れることも出てくる。また、情報がどのように？いつ？もたらさせるか？も影響するのは言うまでもない。学校時代にきいていても、「いつもの先生がまた言っている…」で終わることもある。また、自分の経験が豊かになったから「あの時の意味が分かった」ということも起こる。学びには「時」がある。目に触れても関心がなかった本も数年後に関心を持つということもある。これも1度その情報に触れたことから始まる。その後2度、3度触れて、あちこちできくから手を伸ばす。

マガジンもこうした情報に触れる「接点」の一つになっているとうれしい。若い世代も自分たちなりに情報を得て、物事を選択していく。その時に、あそこの業界にはこんなこともあって、あんなこともあって、そんな中でやりがいを感じて、働いている人がいるよ！となるような情報源でありたい。

たとえG7最下位でも、マガジンが現状の自由の度合いを構成している小さな要素であることも支えである。それが対人援助学会からの今の社会へのソーシャルアクションでもある。

### 編集員(オオタニ タカシ)

マガジン執筆者の団遊さんが書いている日記(Note)の新着情報が届くと、いつもすぐに読んでし

まいます。単純に小噺が面白いというのもあるし、出版物や研修の情報も届くので、そのお知らせをもとにいそいそと申込をする…ということもよくあります。

前号の編集後記が“編集長のファンクラブ通信のようになっている”と書かれたばかりですが、先日 Facebook から“「木陰の物語」の LINE スタンプができました”というお知らせが届き、早速購入してしまいました。これは間違いなくファンです。団遊さんのお知らせに「シロラー必見のスタンプができました」と書いてあり、最初は「シロラー」の意味がわからなかったのですが、少し考えて(土郎 er)だと理解しました。スタンプの絵を見て、「ああ、これは子ども部屋のドアを外した人だな…」とわかってしまう私は、なるほどシロラーのようです。

今号の編集会議で話題になったのが、“自分の言葉で語ること”と“うぬぼれ”について。どちらも自戒を込めて噛みしめる必要があることだなあと感じています。

## 対人援助学マガジン

通巻53号

第14巻 第1号

2023年6月15日発行

<http://humanservices.jp/>

### ■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は

[danufufu@osk.3web.ne.jp](mailto:danufufu@osk.3web.ne.jp)

### マガジン編集部

第53号は2023年9月15日

発刊の予定です。

原稿締切2023年8月25日！

### 執筆者募集

本誌は常に書き手に門戸を開いています。新たなジャンルからの、執筆者の登場に期待します。

自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分だからこそ描ける分野の記録を発

信したいという方からのエントリーを待っています。

ページ制限なしの連載誌です。必要な回数、心置きなく書いていただけます。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。

**執筆資格は学会員であること。** 現在非会員で書いていただく事になった方には、本誌は学会ニュースレターの位置づけですので、対人援助学会への入会をお願いしています。

## 対人援助学会事務局

540-0021

大阪市中央区大手通2-4-1

リファレンス内

TEL&FAX学会専用 06-6910-0103

## 表紙の言葉

このヴァリエーションの絵をよく描くなあと思った。家族で大海原を目指してきた実感が私にはあるのだと思う。

我が家では子どもたちの大学卒業を最終リミットに、それ以降は自宅に置かない方針で巣立たせた。末娘など東京の専門学校に行くために18歳で我が家を離れた。

だからそれまでの期間は意識して一家で旅をしていた。私が運転をしないので、長く車を持たない生活だったから、旅支度は最小限の荷物をカバンに詰めて出発だった。

今、振り返ってみても、5人揃って出かけていた頃の航海感ワクワクするものだった。私が船長で、クルーの安全と無事目的地への思いは強かった。

京都・宮津湾の観光船でのことだ。長男の姿が見えなくなり、落水したのではないかと夫婦で大慌てしたことがあった。しばらくしてトイレから出てきたのだが、思わず叱ってしまった。考えてみれば、小学生が便所に行くのに、いちいち「お父さん、おしっこしてきます」なんておかしいのだけれど。

団士郎 (2023/06/15)